

年 組 名前:

カラス 鳴き声で撃退

青森街のふん害対策に新作戦

例年冬に市街地が増える。これまで有効な手段はカラスのふん害に歯止めを確立されておらず、関係者かけようと、青森県八戸市は「画期的対策になり得る」は、カラスが仲間を警戒を「ガアー、ガアー」。市呼び掛ける際の鳴き声を使「ガアー、ガアー」。市って追い払う作戦を始め 中心部の立体駐車場に設置

されたスピーカーから30分おきに、切羽詰まったような音が響く。天敵を見つけた時などに出す警戒の声だ。夕暮れ時ともなっても、カラスはほとんど見当たらない。近所で洋服店を営む50代女性は「ふん掃除の必要がなくなった」と喜ぶ。新機軸の発案者は、宇都宮市の企業「Crowlab（クロウラボ）」だ。同社によると、カラスは「危険」「餌を見つけた」など多種多様な鳴き声を使い分けている。同社の録音音声を活用して市が2020年2月に行った実験では、電線上のカラス約100羽が、スピーカーの声に反応し、一斉に飛び立った。結果を踏まえ、市は11月中旬、市内4カ所にスピーカーを設置した。21年3月下旬まで、カラスが集まる夕方から深夜に鳴き声を流す。学習能力の高さによる「慣れ」を考慮し、録音した鳴き声は定期的に交換し、念を入れる計画だ。市では7～8年ほど前からカラスが増え始め、市民から苦情が相次いでいた。当初はLEDライトの光で追い立てていたが、飛び立つても近場に移動するだけで効果は限定的だったという。

市環境政策課の大久保洋亮技師(29)は「今まで『これをすれば大丈夫』という対策はなかった。全国の自治体の関心も高いので、良い結果につながれば」と話した。

(2021年1月27日付 山梨日日新聞11面)

問1 ^{あおもりけんはちのへし}青森県八戸市が、カラスのふん害に歯止めをかけるため始めた作戦を、^{がい}具体的に書いてください。

問2 カラスは^{あたま}頭がよく、^{がくしゅうのうりよく}学習能力が高いため、市は^{たか}どんな工夫をする計画ですか。

問3 カラスによる^{せいかつひがひ}生活被害は、^{ひがひ}ふん被害のほか^{しん}にどんなものがあるか調べてみましょう。